

# 銃弾の指輪

アグネス・チャン



# 銃弾の指輪

アグネス・チャン



〈著者紹介〉

アグネス・チャン 1955年、香港生まれ。歌手、エッセイスト、教育学博士。上智大学国際学部を経て、カナダトロント大学(社会児童心理学科)卒業。84年国際青年記念平和論文で特別賞を受賞。85年の北京でのチャリティーコンサート、エチオピア難民キャンプ訪問が大きな転機となり、ボランティア活動などに活躍の場を広げる。89年、米国スタンフォード大学(博士課程)に留学、94年、教育学博士号(Ph.D.)取得。98年初の日本ユニセフ協会大使に任命される。2002年4月、9つの恋愛を綴った短篇小説集『パーフェクト・カップル』(幻冬舎)を刊行し、作家としても活躍。

銃弾の指輪

2002年10月10日 第1刷発行



GENTOSHA

著 者 アグネス・チャン

発行者 見城 徹

発行所 株式会社 幻冬舎

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-9-7

電話:03(5411)6211(編集)

03(5411)6222(営業)

振替:00120-8-767643

印刷・製本所:中央精版印刷株式会社

検印廃止

万一、落丁乱丁のある場合は送料当社負担でお取替致します。小社宛にお送り下さい。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。定価はカバーに表示してあります。

©AGNES CHAN, GENTOSHA 2002

Printed in Japan

ISBN4-344-00232-6 C0093

幻冬舎ホームページアドレス <http://www.gentosha.co.jp/>

この本に関するご意見・ご感想をメールでお寄せいただく場合は、[comment@gentosha.co.jp](mailto:comment@gentosha.co.jp)まで。

# 銃弾の指輪



## 目次

香水

5

銃弾の指輪

15

もつと愛してる

57

僕は君を□□□。

79

優しい恋人

155

できちゃった婚

169

あとがき

装幀  
装画

幻冬舎デザイン室  
岡本三紀夫

## 香水

ミカは、そつとアイマスクをはぎ取った。肌に潤いを与え、目元を若々しく見せるといふふれ込みのアイマスク。彼女は目の下に触れながら、家の前に建つ高層マンションの窓に軒並み明かりが灯るのを眺めた。時計の針は六時を回ったところだ。

また肩が痛みだした。両肩とも、こちこちに凝り固まっている。先日、美容院に行った時、髪を洗った後で肩をマッサージしてくれた女の子が、これまで接した客の中で三番目にひどい肩凝りだと、妙に感心していた。

頭痛も始まった。夕方になるといつもこうだ。日曜日だというのに、外出の予定もなければ、夕食を共にする相手もない。そう思うと悲しくなる。

ミカは、ショッピングに出かけることにした。こんな時は買い物をするのが一番だ。き

つと気分を晴らしてくれる。

仕度をするために、ミカはバスルームに入った。パンツを下げて体型チェック。まだお腹が平らになっていないのを見て、がつくりきた。服を脱ぎ、ヘルスメーターに乗る。体重、四三キロ。やせている。でも、問題はお腹の贅肉だ。出かけるところがなく、特に気を引きたい相手がいなくても、ミカは、いつもきれいでほっそりとしていたかった。

ミカは、化粧を始めた。栄養クリームはポンズのコールドクリーム一つだけ。これが性に合っているらしく、ミカの肌は色白ですべすべしている。頬紅をつけて元気な感じを出し、口紅を塗って顔全体が引き立つようにした。髪はうまくカットされていたので、あまり手を加える必要はない。自分の姿を鏡に映してみる。これでいい。それから寝室に戻り、黒のパンツとピンクのカーディガンを選び出した。今晚は、明るい色が欲しかった。新しい香水をつけて、ミカは家を出た。

ミカは、東京のど真ん中に住んでいる。たった独りで。シンプルな暮らしだが、数人の友人がいるし、男友だちも何人かいる。でも、結婚には

興味がなかった。ミカはエイジが好きなのだが、彼には妻がいる。リョウタはミカに好意を寄せていたが、彼女はリョウタが好きではなかった。タクヤとクボは、どちらもすてきな男性だが、親友のサクラとクラも二人が好きらしい。なかなか複雑な人間関係だ。

ミカの陶芸の腕は大したものだ。生け花もする。でも、このところ、ミカはそういう活動に嫌気がさしていた。人生に、もっと素晴らしい何かを求めたい。だが、そんなもの、今さら見つけられるだろうか？ ミカは、健康状態があまりよくない。心臓が悪くて、食事のたびに五種類の薬を飲んでいる。

暖かい夜の街へ、ミカはふらりと出ていった。通りにはいろんなタイプの店舗が並んでいる。行き交う人々を見物するだけでも楽しかった。颯爽とした足取りで歩いていると、近くの人家から、夕食のおいしそうな匂いが流れてきた。結婚して家庭を持つのもいい。だが、誰かを信じるのはそう簡単なことではないし、一人の男性を伴侶として一生愛しつづける自信もない。

日本には独身者が多いそうだ。ミカにはその気持ちができるような気がする。一人で生

きていくのは、とても簡単だ。この頃は、欲しいものは何でもお金で買える。食べ物やサ  
ービス、愛や気遣い、そして注目を引くことでさえ。今夜は、それを買に行こう。

ミカはまず最初に、自宅から三筋目の通りの角にあるブティックに入った。カシミヤ製  
品とイタリア製のしゃれた靴を売っている店だ。ここの店員とは顔馴染みだった。

「あら、いらっしやい。調子はどう？」

ミカは笑顔を返した。

「ええ、ありがとう。この前買ったセーターに合うスカーフが欲しいの」

服もスカーフも、これ以上、増やす必要はない。でもミカは、新しいものを買いにつけ  
る。必要というよりは、気晴らしのためだ。今夜、彼女は誰かとお喋りがしたかった。こ  
の店のオーナーは、優しくて親切だ。何千円か出せば、その願いが叶う。ミカは十分にお  
世辞を言われ、かまってもらってから、一枚スカーフを買って店を出た。

次の目的地は小さなカフェだった。ちようどお寺の向かい側の角にあるオープンカフェ

だ。若いウェイターがやってきて、メニューを渡してくれた。ミカは、ブルーベリーティ―と目玉焼き付きのドライカレーを注文した。水を運んでくると、若いウェイターは感じよく微笑<sup>ほほえ</sup>んだ。

「また香水、変えたんですね？」

ミカは、とても気分がよくなった。この若いウェイターは、香水を変えるといつも必ず気づいてくれる。そして本当に優しくしてくれる。

「ええ、変えたの。今度のはどう？」

もつとよく匂いを嗅<sup>か</sup>ごうとして、若いウェイターは体を近づけた。

「いや、きつくなくて、いい香りですね。僕は好きです」

ミカは顔いっぱいに笑みを浮かべた。これがデートだったら、もつとよかったのに。

でも、香水を気にかけてくれるひとがいるだけで、ミカは幸せだった。

彼女は通りを歩くカップルの姿を眺めていた。大抵は日本人の女の子が、外国人の男性を連れている。この辺り<sup>あた</sup>は外国人の間で人気のデートスポットで、時代が変わった今では、もう日本人と外国人のカップルなんて全然、珍しくもない。こんなところに一人でいるの

は、なんだか場違いな気がした。さつさとカレーを食べてここを出よう！

ミカは、お気に入りのマッサージ店へ行くことにした。体をもみほぐしてもらえば、気分がリフレッシュして元気が出るかもしれない。オーナーは愛想よく出迎えると、彼女を部屋に案内した。ミカは着替えて、ベッドの上に横になった。

「やさしくね。強すぎちゃだめよ」

マッサージを担当する中国人女性に、オーナーが声をかけた。

「ミカさん、オイル、どうしましょう？ 使います？ それともただの指圧にします？」

ミカは目を閉じた。

「そうね、少しつけて。お肌がすべすべになりそう」

オーナーがクスクス笑った。

「かしこまりました。それじゃあ、今夜はオイルをつけさせていただきます」

ミカは、俯<sup>うつぶ</sup>せになって、マッサージ担当の女性にじっと身をまかせた。

ミカは、深い眠りの中に沈んでいった。大好きな恋人の腕に抱かれている夢を見ていた。ハイスクールで出会った彼だ。美しい花が咲き、懐かしい人たちがいる。ずっと前に亡くなった父親、それに母親。

数年前に他界した夫も、子供たちの姿も見える。だが、彼女の子供ではない。ミカに子供はいなかった。小学生の頃になくなってしまった愛犬もいる。

みんなで川の向こう岸から、彼女に向かって手を振っている。ミカがあちら側へ渡ろうとした時、誰かが名前を呼ぶ声がした。

「ミカさん、ミカさん！」

マッサージ店のオーナーだった。

「大丈夫ですか？ ミカさん！」

大丈夫ではなかった。

ミカは脳卒中の発作を起こしていた。

ものも言えず、急速に意識が薄れていく。

慌ててオーナーが救急車を呼び、ミカを病院に連れていった。

ミカには身寄りがない。

彼女はひとりぼっちで死んでいった。

八十八歳だった。

高齢者で溢れるこの国の真ん中で、独り暮らしの老人が、また一人亡くなった。

ベッドに縛られ、体中にチューブをつけられ、一人寂しくやりきれない思いをしている老人は、ミカの他にもたくさんいる。

彼女はまだラッキーな方だ。

ミカは遺産の全額を、いつも香水に気づいてくれた、あの若いウェイターに贈った。

